『中国地区英語教育学会研究紀要』No.17 (1987.9.1)
〈第12回全国英語教育学会自由研究発表〉

外国語学習における 'the Interface Position'
— Krashen 批判 —

兵庫教育大学　山 岡 俊 比 古

1．はじめに

Krashen (1982) のいわゆるモニター理論を構成している5つの仮説のうちの1つである，獲得／学習 (acquisition-learning) 仮説は，成人が第2言語の能力を身につける2つの過程を識別するもので，それぞれの過程の異質性と相互独立性が想定されている点に大きな特徴がある。このことは，ひいては，学習された能力が果たす言語運用上の役割が，極めて限定されているという点にもつながる。このような仮説に対して，従来から様々な視点から批判が行われている。例えば，学習された能力から獲得状態の能力への浸透 (seepage) が起こるとするもの (Stevick 1980)，学習と獲得とを区別する基準が抱える非科学性を指摘するもの (Seliger 1979, 1983；McLaughlin 1978)，通常の速さの発話においてもモニターが働くことを指摘するもの (Rivers 1980)，さらに，学習が獲得へと変わって行くという事実を，個人の体験として指摘するもの (Gregg 1984) や，教師の指導体験として指摘するもの (Hammerly 1985) などがある。

このような批判を総合して考えると，学習と獲得の区別は，第2言語を習得する者に通常現象的に観察される習得過程の違い（これは主に習得者の第2言語に対するアプローチの違いに由来するものであろう）について述べ，それぞれの過程が結果として行き着きやすい言語知識の状態の違いを言うものではあるが，Krashen が主張するような，言語習得の過程の原理的で科学的な説明にはなり得ないものであると言ってよい。つまり，表面的な現象の観察は原理的な説明にはなり得ないのである。以上のことを，現在提示されているいくつかの言語知識のモデルを利用しながら，理論的に明らかにし，言語に対する意識的な知識を経由してまっとうな運用的知識へと至る道筋を認める 'the Interface Position' の正当性を論じる。

2．伝達を主眼にした中での第2言語習得

情報処理理論によると，人間の情報処理の過程には自動的 (automatic) なものと統制的 (controlled) なものがある。後者は統制に注意を払いながら行うもので，時間が掛かり，一度に1つしかできない。前者は同じ過程を何回も経験することによって形成された既習反応であり，その達成にはかなりの訓練が必要である。この理論が主張する大切な点は，自動化されているあらゆる処理過程は，その端緒においては統制的な処理過程であり，このような初めの統制的な過程が，自動的な処理過程が発達するための踏み石の役割を果たすという点である (McLaughlin 1978；McLaughlin *et al*. 1983)。言うまでもなく，母語話者に代表される自動的な言語の運用も，その初期においては統制下に置かれていたことになる。さらに，McLaughlin *et al*. (1983) は言語処理の自動性と言語の形式に対する意識性の関係にも触れ，形式を意識しながら処理が統制下に行われる場合と，形式を意識しながら処理が自動的に行われる場合を区別し，さらに，形式にほとんど注意を置かずに処理を統制下で行う場合と，形式に注意せず自動的に処理する場合を区別する。

この理論モデルに基づいた第2言語習得理論は，Krashenの仮説が意識性の有無だけでなされているのに対し，意識性と自動性を関連づけている点に大きな特徴がある。この理論は特にその言語が話されている環境の中で，伝達を主眼にした活動を通してなされる自然な第2言語習得のみに言及するものではないが，そこで機能している過程や発達してくる知識，つまりKrashenが獲得と呼んでいるものについて触れるものになっている。情報処理に基づいたこの理論では，自然な言語習得について，これをKrashenのように単なる無意識的な過程として片付けることなく，やはり統制された処理過程として始まり，その過程を何回も繰り返すことを通して自動性を身につけていくという面を明らかにしている。

3．形式に注意を向けた中での第2言語習得

Krashenの示す学習と獲得の区別に対して，Bialystok (1981) は顕在的知識（explicit knowledge）と潜在的知識（implicit knowledge）を区別する。前者が言語の構造に関わり，分析的で，確認可能な，脈絡から抽出しうる知識であるのに対し，後者は使用に関わり，直観的で，はっきりと把握し難く，脈絡の中で機能する知識である。Krashenの区別との対比で重要なことは，顕在的知識が明言的知識（articulated knowledge）と区別されることである。後者が言語規則を言葉で定義的に述べたもので，言語学的なものであるのに対し，前者は言語構造に関する知識ではあるが，命題的な（propositional）知識である。Krashenの言う学習された知識は，その定義からすれば，多分にこの明言的知識のことだと考えてよいであろう。

明言的知識が言語学的でメタ言語的であるのに対し，顕在的知識は構造に対する分析的な知識ではあるが，言語の実際の使用を構造的に感知するものであるから，心理言語的な知識と言うこともできる。従って，この2つの知識はお互いに異質なものとしなければならない。第2言語教授・学習の目標は明らかに心理的に機能する言語知識の達成であるから，明言的知識はそれ自体では目標たり得ず，本来の目標の達成という見通しの中で，その果たす役割は間接的ならざるを得ない。例えば，Seliger (1979) は明言的知識（彼はこれを‘external conscious explanation’と呼ぶ）の役割を，内的な知識の習得を促進することと，記憶を補助するものとに限定している。このような識別は明らかにKrashenに欠けているものの1つでもある。

このように見てくると，Bialystokの言う顕在的知識へ至る道筋として，まず明言的知識を経由するものが考えられる。つまり，明言的に把握された言語規則を実際の文の生成の中で適用（application）してみるという体験を通すことである。建物を作るときには足場を組む。足場は建物そのものではないが，その形状を間接的に表している。そして建物はその足場を利用することによって建設される。建物が完成したときには足場は必ずしも必要でなくなり，取り払われる。明言的知識の役割は，この足場のようなものだと考えることができる。

顕在的知識へ至るもう1つの道筋として，直接的な道を想定することができる。つまり，構造に対して意識的に注意を向ける活動の中に，メタ言語的な説明を受けないものが考えられる。帰納的な学習がその代表になると思われるが，この場合，学習者の内部において直接的に機能しうる状態の知識を得ることが可能である。また，明言的な説明を受けた場合でも，学習者の中にはそれを心理的な知識へ直接的に変容させて取り込むことができる者もいると考えられる。

顕在的知識と潜在的知識を区別し，その移行を提案するBialystokによれば，この移行を実現するものは「練習（practice）」である。つまり，前者の知識の運用（employment）を体験することである。

情報処理理論に基づけば，顕在的知識と潜在的知識のそれぞれに，そのありようとして，統制

的なものと自動的なものを区別することができる。言うまでもなく，前者から後者への移行は，それぞれの経験を繰り返すことによってなされる。

4．第2言語習得モデル

以上の議論から，伝達に注意を向けた場合と，形式に注意を向けた場合とに分けた第2言語習得過程のモデルとして，図1を提示することができる。

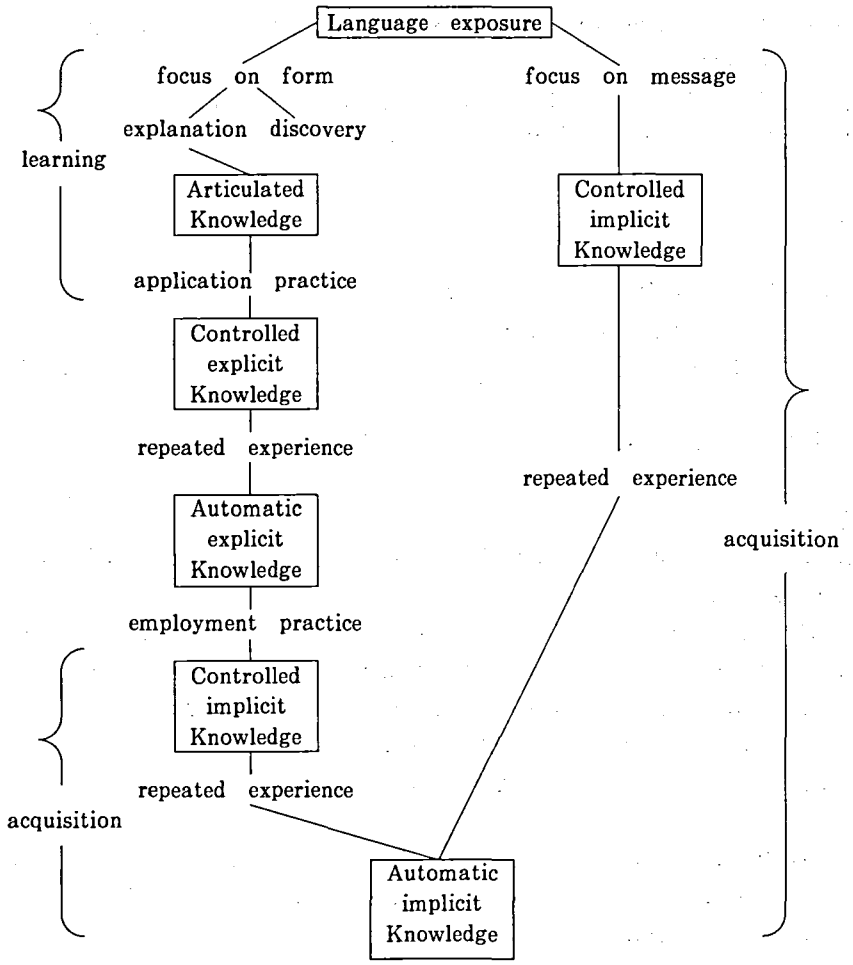

図1　第2言語習得の融合モデル

5．'the Interface Position'

Krashen (1985)に従うと，学習と獲得のあいだに何らかの相互的関係を認めようとする'the Interface Position'に3つの種類を確認できる。第1にあげられるのは強い立場で，第2言語の獲得は必ず学習を前提とし，それを通すことによってのみ可能であると主張するものである。第2の立場は弱い立場で，学習が獲得へ変容しうるということを認めるが，あくまでこれを，獲得に至る

別の筋道として位置づける。第3のものは，より弱い立場で，獲得が学習によって間接的に援助されるとするものである。Krashenは第1の立場を論外とし，第3の立場を自分の主張と矛盾しないとした上で，第2の立場に対しても，簡潔性の原則と自然な獲得順位の視点から反論を加えている。（Ellis(1985)は，全く同じ用語で異なった定義を提示しているので注意を要する。）

既に示した議論とモデルからすれば，言語の形式に注意を向ける学習では，目標となる潜在的知識へ至る前段階として顕在的な知識を身につけることになるが，これはいわゆる学習を通して導かれる。従って，ここでは目標となる知識を得るための道筋として，自然な習得過程とは異なったもう1つの道を認めることになる。これはとりも直さず，the Interface Positionの第2の弱い立場となる。これはKrashenの反論にも関わらず有効であり，多くの第2言語学習者や教授者の経験に見合うものである。

また，自然な習得過程，つまり，Krashenの言う獲得にも，意識性という視点のみからは見えてこない自動化の過程が絶えず随伴して起こっているのである。

6．まとめ

以上の議論から次の3点をまとめることができる。

(1) 学習が間接的にしろ獲得を促進するということを否定する理由はない。

(2) この立場は，自然な習得過程とは別個の習得過程を認める‘a weak Interface Position’である。

(3) 獲得の中にも統制状態から自動化への移行を認めなければならない。

REFERENCES

Bialystok, E. 1981. The role of linguistic knowledge in second language use. *Studies in Second Language Acquisition* 4 : 31－45.

Ellis, R. 1985. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford : Oxford University Press.

Gregg, K. R. 1984. Krashen's monitor and Occam's razor. *Applied Linguistics* 5 : 79－100.

Hammerly, H. 1985. *An Integrated Theory of Language Teaching and Its Practical Consequences*. Blaine, WA. : Second Language Publications.

Krashen, S. D. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford Pergamon Press.

Krashen, S. D. 1985. *The Input Hypothesis : Issues and Implications*. London : Longman.

McLaughlin, B. 1978. The Monitor Model : Some methodological considerations. *Language Learning* 28 : 309 － 332.

McLaughlin, B., T. Rossman, and B. McLeod, 1983. Second language learning : an information-processing perspective. *Language Learning* 33 : 135－158.

Rivers, W. M. 1980. Foreign language acquisition : Where the real problem lie. *Applied Linguistics 1 : 48－59*.

Seliger, H. W. 1979. On the nature and function of language rules in language teaching. *TESOL Quarterly* 13 : 359－369.

Stevick, E. W. 1980. The Levertov machine. in Scarcella, R. C. and S. D. Krashen, (eds.) 1980. *Research in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass. : Newbury House Publishers. 28－35.